

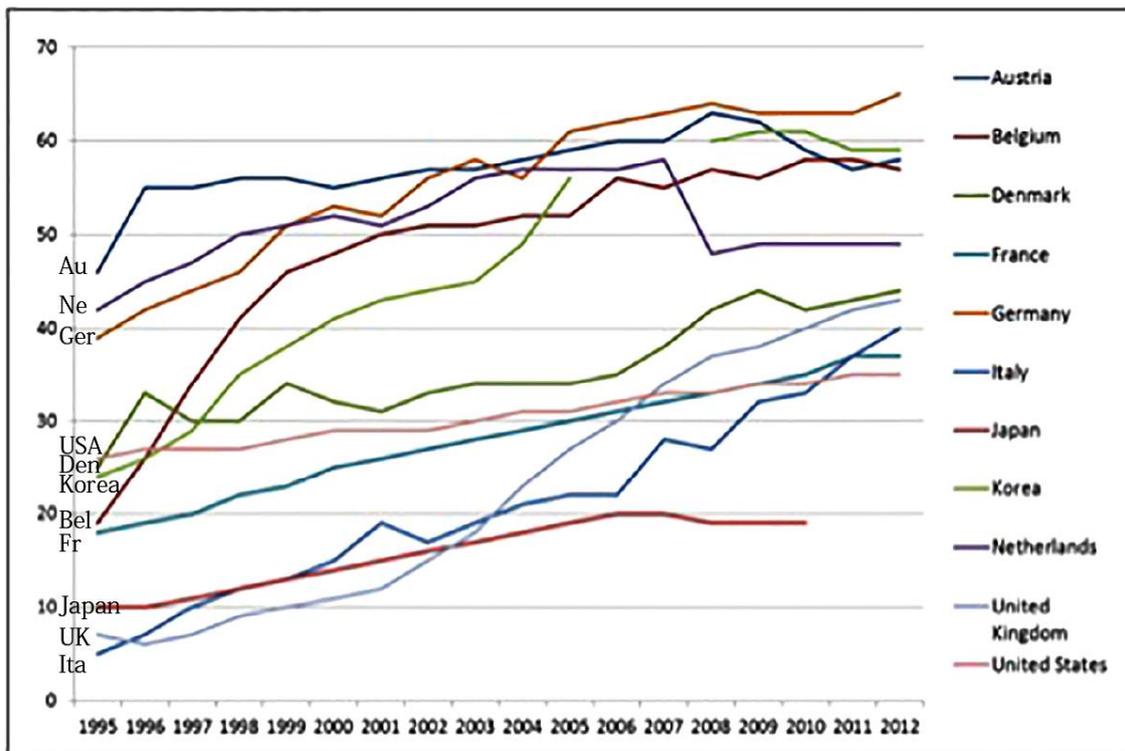
《第 58 号》「感じ取りたい”本質的なこと”」

山本 義美（容器包装の3Rを進める全国ネットワーク事務局）

21 世紀の環境問題は、“捨て場の枯渇”が重要と言われており、CO₂ の捨て場の問題が気候変動問題(国際問題)で、廃棄物の捨て場の問題が最終処分場ひっ迫問題(国内問題)となります。

私たちはこれまで、戦後の高度成長でもたらされた“大量生産-大量消費-大量廃棄”の社会システムをそのままにして、“大量廃棄を大量リサイクルに転換”してしまったことに対して課題を指摘し、改正市民案という代案を提示して参りました。

ところが、OECD(経済協力開発機構)の報告によれば、2012 年度の家庭から出された廃棄物のリサイクル率(コンポスト含)は、ドイツ65%・韓国59%・英国43%・米国35%に対して、日本はわずか20%しかないことがわかりました。環境省『こども環境白書2016』(2015 年発行)の「大人になったらごみが捨てられなくなる!?’」の中でも、「平成25 年度末の時点では、このまま毎年同じ量のごみを出し続けると、あと19.3 年で処分場がいっぱいになると予測されています。」と警鐘が鳴らされているにもかかわらず、です。世界に誇るリサイクル社会だった江戸時代を思い起せば、残念ながら今の日本は“リサイクル後退国”と言わざるを得ません。



いまこそ私たちは、“見たいものしか見ない” “知らされたものでしか考えない”という蝸壺状態を抜け出し、政府やマスコミの一方的な情報を批判的に読み解くことを通じて、真に持続可能な循環型社会に転換してゆかなければならないと考えます。